古今和歌集抄 二

伊地知文庫
文庫20
310
2

文庫20
31-2

伊地知氏書册

古今和歌集両度聞書巻第二

初度は文明三年九月廿八日戌の刻始め
同月八日午の時成就し早後の度は八月六月
十二日巳時始め七月廿又日巳刻に切成し
畢前後相違し所々汉字付之者〻此集
の題号稙〻の撰者の第一無表紙の門
と當代と古今の二字にあてゝ書かゝり
ゝ所にはひらかなにて書ハ我国のことはにて
なくしてせのみちとのことゝ云ひけ文武天皇
はみちとりたんさうにて始めゝまゝくして 摂
本人丸と山部とを師として道と学ひ給ひ

古今二字之事

天武御子 第一
才二の御子 五十七人
四十三代
四十四元明御子

代々ありきたれる詞へまことに古代の字なり
わてゝ国分の中と今の世代延喜一堂代なり
まゝゝて志ゝと和奇のみちふかんと志
発れてまゝて発ゝこれ師ゝまれりと物
當代と今の字なり知されハ道のんとなく
ゆゝりまゝかのむゝゝきれとゝ先師柿本人麿
ゝゝけ品ゝ又一の義ゝ古とは天地未分の時
とゝれは天地未分万物未具只本分なれ
而とゝ志ゝ今ハ国常立ゝ也ゝ
と日まて一切泉生の境界と今の字なり
ゝれ品なり又一義ゝ正直の二字と古今ゝ

和奇之事

わてゝ志ゝ正ハ自性のゝ自性ハ玄妙のとゝ
而なりわとゝれハ正直の二字ハ尺なり中なゝ
ゝて中なるとゝ志ゝ直と云ハゝ不邪と直と云ふ
中ハ意根の縁なりとゝ志ゝ尺ハ中なゝ
則正ハ天照太神の心なり直ハ心とゝ
ゝ而の義なり天下ハ正直の二字にて和さまる
ゝのゝ志ゝれハ正直とゝゝゝとせり天地人と正
直ゝゝ此時ハ天地ハ正人ハ直ゝ世間のゝとなされ
ゝゝむ而の奇ゝ正直と可寄なり先奇人々
思意而なり和奇と先和ハ世間の名ゝ奇ハ世間
の風なりゝれハ道とゝゝゝゝゝ事なん

かゝり事道の美風をあらの和しゝを生ずる物し
除自他美風汝直んと丁思し世と治家と寺
道ゝ心心惟世道ハ和と汝て淫ゝとゝへき物
なり人の又戸人し天地の和しゝ和ゝる物かゝ
世界の和しゝ人めしゝのひとゝ和さまるゝり
されいんの和とる所しゝ寺しゝ治しゝきせ
集とは内外の道とゝ同しる義し発ゝその
数とゝいら第一第二しゝみゝゝゝんしみか
ゝ度なり之ゝゝ注と寺る事世集の
服用なるゝいゝへゝ人の心とゝ法ゝゝ之ゝ
ゝて道と寺るんゝゝゝきを系れ

代ゝ人みかみゝゝゝゝれいふも世むゝと
わふき道とゝ和道とも教むへき
事ゝゝゝゝ又云ゝ是号ゝ一義も治ゝ
出る事有定序の周書ゝ載ゝ

春哥上　　六十七首

山がつのかきねにさくる春日よりの序

在原元方　　カナトヤ可讃ハラトヨムヘシ

年ぬけのかきねにさくる一とせとやいとゝ年とやいはん

此哥巻ノ頭ニ書ル　古今ノ二字ニ能相叶フ故也

此哥は古今集の序にとりて紀の年ぬけの年ぬけの立春とゝ得るかの
別のこゝろ一巻の序分かりたるにて
見てそのこゝろ分かり是れ古今集の本
新かなり一部の哥ともあれ多くこゝを理とする
一切の根源とする故に英之哥人こ
絶とりそこなとさしてゝ梅は集いとく物
の法度と直りすなわちこゝをもって

古ハ万葉
今ハ此集ニカケテ云リ　古ハ天地開闢ヨリノ事ヲモ可云
今ハハ当今ノ御時ヲモ可云
帝王編年記之ホニ
感二

三長と代人として年の内は三長人なるハ
いく代集ハ是名医の流万姓の楽わらん
事をとりやくして長と云代に用ゆる薬の
用方抱朴子ハ仙人の長のきそろ事なくこ
の教をる徐ハ仙流ハ仁流も来とくれこと
民はんと云ものハ徐ハ
とそ
古今は表字世一首とりてかしひ志ろ事を
卯花者世別ハ徐ハ世一
卯流とうくへ
小八事ハ人は名誉是ハ心ハ和の
感をる不をはなかしひを是実の古人

神ひちて結ひ（損ノ字ヨミ神ナフクムト云云）水は氷まるとは長ハ風やとく春ん
世帝ハく所の春ハ実ハ朝日のん
ちくんハ変はるとはさりはる水の氷ハる
さ雨もこと異ハるを事ハて作りつると長ハて
東風の風とくさ雨ハて長ハてりんもりつくかる
んかりて神ひちくくとは大くさひさをこ組む
はもくくこを春とよめるかといの事ハ春宵
只光陰のうはる中こもまくき人はれはを
なくてもとわるもはまくかの世はことを
とそへり

紀貫之

ソレヽヽトハ

何ニヨッテ讀人ト
云事ヲ不知ト也

讀人不知ト書テ
左ノ文ニアル人曰
人丸カ歌之ナト
書ハ文ノ一体也
可知

是不知　是しもやしふ事は高雅の景
氣ありのそこてよめる事もまた會不知封
酌なりやりしよる事もわり又是わかまゝとも
わるもれさまにはさる事をもさ定まりぬ
事なり　よき人ならねとも　わるハ勅勘の人
わるハ貴人わるハふるき世の人又實よ名をとて
縁ハうけぬ事もわるへしさ此哥乃作者只隔
わり是ハ勅勘の時之勅勘なれとも此三
首りし入らるゝ事且ハ其之か名誉又ハ君直
なる義なり

亦下賤ノ人ノ哥ナトモ

一本ニ此哥ハ是ハ延喜ノ寛平之ノ妹ノ哥新撰ニハ人ナト有リ　ヨミ人シラス

亦佛神ノ歌ト云
侍レト慥ナラス

春霞たてるやいつこみよし野の吉野の山に雪はふりつゝ

ツヽノ字ハ上ノ句ヘ
カケテミルヘシツヽト
云テ上ヘ返ルモ有リ
又ツヽ面白キツヽ悲シ
サヨナトヽ不尽ノ心
モアリ

吉野ハ花ノ名所
ナレハ春ノ花ヲ待
カヌル心之

三ー　上中下ノ有云
御ー　白王居儀
深ー　奥深之

春のしたをとみよし野の山しそ見侍らぬ
と詠むるよ雪うちふりつゝをさしきもなれ
はいつなるそれは春かすみたてるやいつこ
やよそなり花とも又よそくふるまてしても
むなしくなりわりれかはすこともたてりと
思ふんなり寵を稀ふハ花とかすみ心も
あれるあり雪はよし野の山たかさ所家
穂はしとなるらし侍るなら又の流こと
そりをふりいふハ初心の人のためあり
ひさくりけて云哥なりことくりを
とらめぬを古今の正意とすへし花まて

二條ノ后ノ春ノ宮ノ御哥

雪の内に春はきにけりうぐひすの
こほれる涙とけやらぬに
世雪ふるうちと年の内の
数こそ多き年の雪かな
春立つ日ぶくるまでに月数をや
春立つ数にかぞへ入れけん
られてゆくる鶯もとしのうち
よまつ人もたきぬんのうしとそ
一　数と数をとるこそ
事をもやしてくん人は遠退を
きのうはかるく数に春
題不知

梅の枝よりきゐる鶯春立つ
ことの日ぶくるまでに
雪の木にさかりなれ
ヤヨメル

春たてば花やあらぬと雪とこそ
遊者其数樂遊者其吟歌と云
てうくひとをとぶくに
題

ウセイ

ヨニ

ふるさとは深てしれぬ消ぬ雪の花と見ゆん
しれたるやはかりそれいまこんはあ
そめくかまたそ消ぬ雪の花とはかて
ゆくとこそ知れなるや消ぬ雪の花と見
あんともいかなり消ぬ雪と共春の雪のさ
かり　桜ハウルマテノ花ハ三十春

フニヤノヤスヒテ

二條ノ后ノ東宮ノ御

春の月はえてあるる我なれとかりらの雪と消そ侘さ

雪ノ木ニサカリナル

大臣ノ哥

忠仁公之

清涼殿奥庭ノ桜ヲ
アリハ春ノ山ノ又ハ
昔ノコヽロハ忘
故ハ花ノミ思フ
ワレ雪ナリケルモノ
ヲトコ

キヨ井ケル時
三月三日ヲ八ヘミ
メニテオホセコト
アル間ニ日ハテリ
ナヨフ雪ノカシ
ラニフリカハリ
ケルヲヨマセタ
マイケル

（天平ノ日ニ タト云ヘレハ東宮ノ御世ニ）
春の月光と共春の母云なれハ云ワハ
こけうこ所めくれうり わけうる方をれとも花ぬ
（北斗表ハ法懐ノヤウニテ深キ祝之）
きこ行と思ときれ代よもかうへてあいう
（目出度カルヘキ御引出ナレトモ吾妻ノ俗キスレハ長クハ遠ヒトナリ）
をとさうとかけくんみ流詞するかみて
内かこもかくれぬうきとく

キノツラユキ

雪ノフリケル寒なら其のめもるれ雪れ紀里も花を散ら
ヲヨメル
（二月ノハマヘルハ山ヲフミナ花ト見ナスヨシヤ）
其のめをもるとも其のめ むりなれとそこ
あにてハ其へうつてを見ぬるへさうやんい若浦乃
あまゝひをとそへてこよろこ

ハルノハシメニヨメル

フヂハラノコトナキ

其やとき紀やとそきとやうん鶯こにも恨ともるる武
（花ト云ハサクラニヲヨフマテハ皆梅ヲ云ナリ）
さ紀とい何の紀とさ其の春

ハルノハシメノ哥

春きぬと人ハいとと鶯なとこそ云
のこうくいもこ毋もなりもとるれとハこ川
人なり其と紀と紀二のとりとうくいもよ
てきるへきんなりるや（学ヲ待コロノ示サヤ）

ミフノ忠峯

春さとと人ハいとと鶯なとこそ云
わしとそ初ふとは さうもわしといふう
うくいもとと紀とこもれも初其の奇な
ふへ（人ハサイ（元号也）ロカル間ガハアラレト思ナトヘ）

源マサスミ

寛平ノ御時后ノ宮ノ哥合ノウタ

谷風ふこ谷風のはま毋ふ新出る波や其の内紀
毛結ふ谷風ハ東風なりといふう嵐流毛
源谷もそもいこうりめる其の風ふこく海水
なりるへてのんと

キノトモノリ

菊の露と風の便りたづねてそ鶯さそふ谷へよ入る
うゝ人とのなけりうとむとしもなんなりく
おりゐしれる後
鶯の谷より出て教ふ人なくして
いまゝ出ることおりゐぬかとの初ゆ
明とてくなる紀出ることを思ひてくるあるや
大江千里
在原棟梁
十月二十朝一月二
北時茂和尚ヲ
夜但ヲ玉田屋
基たてと菊も白雲山里ハ初うる初よ鶯そなく
基川菊の咲よりもさも作るゝ山里ハ時鶯の
初もおうき板なりとて菊もかいる山里
と一門りしたをそ白ハ分上の事なるへ
とそ見ハ弟うゆ人事のうゝうゝぬと見始

てうく流れ移ふ去くまし繁よ的よりて志りとも
もれ山て
賢へ近く家のせれ鶯の時なる教ハ初ゆ
見もうくひとのこ志と思てわりふんく
仮情ゝ奇ふくく
三月
基日賢分ハかやきそ若年共書も籠ゝ紙ゝ
人ハ賢遊の仮こりて年のたもあるし
と月潮年ふれ下りえ初ゆうくいまくわりは
毋分てて下りかの見ゆゝ見ふんなり
家もおりれとは基の賢ゝ立ゝ
板の仮こゝ内形ゝ山ゝ賢ともやくそ
ひとこしラス
ヨニ人こしラス

とよむなり

深山には松の雪たに消なくに都は野への若菜摘けり

心は深き山には雪たにも消ぬに都は

もはや若菜つむなり松へは山よりきえ

なれは詞のよせよくいへる也松は真木

なくなれてかなれといへる説あり月雪は

松にもれる切なる趣なり眺望の心ふかし

し侍りや

春日野のとふ火の野守出て見よ今いくかありて若菜

此抄り春日の野もりにふかきよしのつみてんと

見ゆて事を野守にあるへきよしをゆへさし

梓弓おして春雨けふふりぬあすさへふらは若菜摘てん

ある説にあすさへふらはといへて若菜つまんと云説

いへとあすさへふらはわかなもまさりてつむよ

あまりなるへきよしなり

君かため春の野に出て若菜つむ我衣手に雪は降つゝ

きみかためいはふ事とすることのさなれと雪ふかく

袖のしつくは寂寞りよう侍るしと孤きし内

り王道もこれつくりてさうる心祈

ともいへれは文字の手をとらるへし

縁へり趣して此哥はおもりてのさ渡のめく

たき此哥なり

哥ノ上ニマツレト
オホセラレシ時
詠テ奉レル

春日野の若菜摘しやしろめの袖ふりそへて今のゆきん
ゆきそ野にかはらぬ
ゆきなりけりそへ行さへ同
事しやはりそへくしけるさ枝なり

在原行平朝臣

題しらず

吉野山嵐はさそふ花の衣ぬさとそ人の手にはまかせる
うすくこきこの花のいろ
折なりけりさそふ嵐の
ゆきとのみ
ちる花の義なりけりとは
なるへくなりとは
ゆきとのみ

源宗于

寛平ノ時后宮ノ
哥合ニヨメル

ときなる松のみどりも春来れは
と一しほとはなりにけり
ゆきのうちの
ゆきの宗于は光孝の
忠親王の一男光孝の
孫

哥しらず
奉レル

我せこか衣ぬる雨ふる毎に
序哥なりけり
袖なりけりとは
青柳の糸をよりかけ
ふりそへて
とりけりとは
とりの事とは
遠のえん無なるへし

ツラユキ

西大寺の
柳ヲヨメル

僧正しらず

濃みどりの糸をよりかけて白露を玉にもぬける春の柳
前代聞のやうにいかなれとも

哥ようかなり柳ちとゆうりうれこ遍昭
もうくとえみする所ようきなり　三人
百子島さこ作る玄ハ絶毎よわくまん性秋をゆり
上ハ時ゆるかくや立月のをちひこ玄ハ絶毎り
とゆうちゆめ絶川の事これるかなるへわ
らくまるハ常一位のんくくみを立ようわく
まれとをりまをそりりとうち歌くゆし
りくゆるのるれ柳よくりくゆる
歳旦のうけさをちゆ常にれかつなくもよこ高
源山幽谷よりけ入て春をれたちもりめ
れりゆ一位ゆるのそこをちなく鳴りくるれ

一ノの声ヲキヽテ越ヘマカリケル人ヲ思テヨメル

春くれハ鳳凰なりハ白雲の道ゆさふりこゝ地して
みちもりとりとは道も沢こみ清ひう所は
かりひハ和をそよかをこれハかすかなる和ハ
ゆくもと秋の月出ぬ春の所をも一ゆうよん
出ぬと所ようもん

元阿内ノ

帰一トヨセル　花ちり

春霞立を見捨てゆく雁は花なき里に住やならへる　伊勢

我をさしてへき花ありぬへく深からく
よめるこゝろなきさまにも見え出しから此あり

折つれは袖こそ匂へ梅の花ありとや爰に鶯そなく　読人不知

かくて梅ありしうくひすの来てなくむかふよ
絶まさるなりひとへにえんありて余情風
情ある歌なり

色よりも香こそあはれとおもほゆれたか袖ふれし宿の梅そも
いかにはなかくる袖ふれしかるへし
宿をく梅花へしわちきなく詩人のうふかやまえかれら
かなしさも恋の歌よりは花をたゝ梅を思ひある心也

袖の匂ひかとにほひてそれとしらるへし

梅の花を折て
よめる

梅の花立よるはかりありしより人のとかむる香にそしみぬる
かりそめに立よりしをとれと猶そへかをるへし
人のとかむる迄にそとは艶えんしの縁は
おもひも又の流女の匂へ立よるへしとよそへよ
見るとも出ぬ家の集にも云ふ事はそよ
精面たにおもそへをとふてさうかひなる益
晴の歌也

鶯の笠にぬふてふ梅の花折てかさゝん老かくるやと　東三条左大臣
うくひすのかさにぬふてふとは梅の枝の
おひさきを出れはかなしきうちふさをいふ也

云事不用死せんと思よりは世にて言
もいはまほしくせる梅なれはかれりひとへ
てゆかしく

ぎょう

赤ゆのこゝろ紅とて見し梅むめの多き中に彩て花の
ゑんは梅とぞ思してわすれていにへかなくとそ
ちりもかなれ

梅の花と初りて人に送り先

春来て雖(たれ)ゆゑ梅ゆゑ見せん梅むめ多き中にて紅
ちりぬ人かなとはいはてゑんせんとこゝ多ハ梅の
梅こゝ多くてきんこゝのん世上の人は
咲かとと見しるくきんて大(づ)遠は梅と思ん
のこゝもやうなるとこゝつくきとのれるり

土佐ぎょう

友則

道の事をくゝ大庭人に新(しん)てこゝる
きんなりくー

くゝ梅ゆゑ

梅花白ふ山ゆゑ梅ゆゑ見せよこゝ山ゆゑ
見人のこゝいんなりー見(ざい)よハ梅とハ見くれとん
はるの奇こ

貫之

日歌ニ梅の花ヲオリテト人ノイヒケレハオルトテヨメル

身秋ゆゑ梅花見ん梅花ゆゑ
ものとたつゝてそ
と言人ゝ見ゝ
んゝこゝ梅花

三ツ子

ハルノヨ梅花ヲヨメル

春の梅花園(ヤミ)なりー梅花ゆゑ見せ
ゆくゝき

あやなくとはぬ人のかひなくさ事とあらさ
なくなりとつれなくてかくさたよりかくさたよりかひとも
かくさてなをさてよんて世上の人はんり式後
ありしくはりひさしくへ
かくさてこそかんかりいさもといひ出て侍
ひとりれいさハ典之久しくとはぬさりける
事を恨し心もおろかりける所とはたらし事と
いはんとく我ら世たらあてそ侍
ひとりてれとそるんと
侍りケレハリコニ
タテリケル梅花
ナ折テヨメル

ツラユキ

人ハさんもさを花をひとり此に白ひろる
前れと世れんと作ひとやうあるへき

ハツセニマウウルコトニヤトリケル人ノ家ニ久シクヤトラテ程ヘテノチニイタリケレハ彼家ノ主カクサタカニナンヤトリハアルトイヒ出シテ

みもかなれをかくいそなくのんこそたれ
ぬなれとはりしんと人ハさきもとと
ろるしやしあるハ人くなれ来ぬ所
もそるるり

伊勢ノ

梅を見て咲り久るを
愛ら

春毎にかりて川と花と見ておれれ水と神やれ
ぬ色り水れかとりよ梅ひさそりるとと
ぬ色に梅ちりひとをへて川とさへ花と
見れ色をそ梅おれれ水よも神とり
しのへきしかをを色にとりもを
んありそそれきりしてんの世の中れ
ちはさハたれれ水に殿るさ事のゆし

年とへて死の境となる水の数とも云
死のちりはひて水はてとなるとも
ひとつはとやうといふこと
死のけれ水のきしと年とへてはしり
なれしうわへなくて死のちりとも
はりひとへとなるなりたるへ
雲のうはなとれうしこと一事は年
とへて死と水とのゆ中とはしり事なり
ひとつはなり

貴之

ものとわくとめられはとはむ流の今はうろひ
うはうふ事のうやきといそんとなりあ

寛平ハ時后宮ノ一の寺

家ニ有ケル梅花ノ散リケルヲ詠ル

ふるもをいつよめられはくれ毒せり　横人ノ一
はるとはれよはしてらそのなかさなしほ
花ちり散んとうさゆへよくうるるもり　ツセイノ一
散と見てるへきはとはむうたて白ひは神ときまれる
うたてい物くしたてしきせんうるんもり
かくもんいそれてうく神ときもしし
みはわまもりかせをりの心なりはれんに度
白てはは物とをたまはしてはれ氣を
とてもるいさめなり

ちりはなとたは世物むはとは時のこひ出せん　三人ノ一
義なしたりひてとはなひてとはれはてと人はれはてと

人ノ家ニウエタリケル橘ノ花ハ咲ハシメタリケルヲ ミテヨメル

ほとゝぎす

橘のうゑしを
と年ふれど忘れもせぬ橘花散敷とゝかすとゝ
人の家にうゑしかはしるやとゝ
玉鼻宣殿殿前追欲ひんこ浦世もとゝ
山ほとゝ人もとゝさめぬ橘花ゝ散ぬ
別義ゝ
荷乃の命ゝ
とゝとさめぬ山橘とゝ
あゝてゝとさゝ
とゝひてゝ
とゝきゝや

ヨミ人ノ

ほとゝぎす

とゝへゝ
橘花散ぬ
山さゝとゝ
ひ人の文字と
寝のゝ
年ふれいよひ花ぬ
ゝと
荷のゝ
世中ゝ
ゝいゝ
きゝ

深殿后ノオマヘニ花カメニサクラノ花ヲサシセタマヘルヲミテヨメル

ナキサノ院ニテサクラヲミテヨメル

サキノヲホキオホイマフチキミ

在原業平

わまこ氏はのわひさのとうふなそれなくい
ねるかなり

そ〜〜

ヨミ人〜〜

ねたる枝瀧なくもれ橘むしろ敷てもうたはんの
涙をねこしてくれの枝のもるさんれか紙なし
ねたしるたきなくもれ郭といるゆうろん
う侍るやとと後撰ひろかり

素性法師

山ノサクラヲミテヨメル

見てのみや人に語ん橘枝ひとに敷て家法とし世
ぬしうれかりもとまれ奇のもとる
色ふくんとうへ

花サカリニ京ヲ
見ヤリテヨメル

見つせは柳橘をこきまぜて敷て春の錦とし
都をとりしいふ山のあきにもるこんい敷

橘の花のもと
みく年ぬ
をもるうとうと
なをさめて語る

紀友則

奈良の都の春の日に匂ふ人をわすれなむ
橘をこそ思へ昔の人の袖もかをる紀奇いはの氏侍るし
やうしかの人をわすれなむもるとは辛ふる人
のかのあるの枝のもとなもわすれなむもるとは忘
れなむ

貫之

雅なりとこの歌は
雅なりとこの歌は
雅なりとこの歌は

サレルオクラヲヨメル

雅なりとこの歌は

哥奉レト仰
セラレトキニヨミテ奉レル

橘枝峠にもしも見の山ひとも見ゆる白雲
ゆうくんれ新人結れ奇のもとるこむわ
くへさ氏侍りとそとそ寄みもなしひと

寛平御時后宮ノ一ノ御歌

みよしの山へさくら花ちるかとのみあやまたれけるかな

吉野山雪ふりしかとまがふかなれいくよをへてかくはみるらん

山へとはるとも

親なり

伊勢物

花ゆゑ人のいたはるるなれば

花なくて人もいたはるるなれば

花ゆゑ物をおもふ人なれば

花なくて物をおもふ人なれば

同月わる年よりたれい色の糸

ゆ人へきと長けれ事かけるす

但奇ゐ未のまのんかをてらへ

なりとををかよいて叶ぬ事もあり

ゆたるとなるもいるとつきまへさ

サクラノ花ノサカルトニ人ノ心ノ変ルヲ人ノキラヒ給ヒヨメ

とはへ

わるかりと名にそたてれ物も年を稀なる人も結ぶ

さくらとはわるかる物とおもへ花ゆへこそ抑

なる人と結つけ侍れいわるさ無わるすとおも

なり世遠所

ゆ人と花ゆ遠所

我ゆへきそ物をかきはふこそ物とも

雪とは見るとそ人の花とはいうみんと

ゆんとは集て

歌ゆ遠所ゆ

花ゆ物をかんかの義なりこそ

ヨミ人ノ

ヨミ人ノ

わすれきゆや

折ごとに折をたにもうゑ櫻むいさ宿りて散まてはいこん

人はいまはとてはかへるべき春はわすれぬ花のかゝ

とさいてはいつこをかれは宿りてもいこ　キノアリトモ

櫻咲ぬ夜はうく濡くちん花の散をん後のうゑ

花とはなにか春はかすみ

我宿の花をたにとはいはしとうゑき　ミツノ子

花ゆへうゑしうゑしもとへ花をしはいはしの

の心といはしてうゑきとうゑしうゑ心をし　伊勢力

見るへしかは紀山里の櫻花かは散をん後をさうゑ

櫻うゑ野ていひとをかの櫻のうゑか迷惑の

サクラノハナノ咲リケルヲ見ニマイラシギクリケル人ニヨミテヤクリケル

亭子院歌合の時ヨメル

心あるへ　伍巻　又白ものかうゑんを祈ぬ

むかしをうへ

春哥下　六十六首　読人しらず

長閑なる山のさくらの花うゑんとや人のうゑうゑ

うゑしうゑと人のうゑ花かへ風かなれと

花をうゑうゑしの淺瀬に寢しの眺しうゑ花

もかふとはくうゑへ花歌數をとゝいへん

かうへきゝや

山てとゝいへとうゑうゑとまる物のうゑ行と櫻ひま

ふかきまてとりてとゐるあかしへ
かゝる蛇と物りふんけはさうん数やすし
ゆへうしう物蛇をかりふん一しかまさ
まをいふ後
路ゆ此く数て月出き物蛇わりて世ゝそのう
ゑくくこれ蛇もとるやうのふくいめつるし
蛇のふいかなり　長者多蛇のふこ
この里ゝ藤祢ゝ物へゝ物むちりのまるひゝ蛇ちられて
はさくゝ蛇のちゝ和といふこちりのまるし
とはちりまるふといふこちりまるふちり
ふいめこ

僧迷廻服ニヨミテナヲリチル

雲蛇の世にも似ぬ蛇物嘆と見てぬゝ数ゝちり
蛇さくゝとは蛇の中の世ゝ似ぬる蛇くいん
たりゝいふりこゝられふかさゝも見わ
ふふふいやうふふへゝ蛇物といふのい
なゝ蛇のふいかこ

コレタロノミヤ

物蛇ちゝ蛇なんちゝもそて為人のさてもはなく
蛇もしるまきふ人のたゝこゝおりふゝ
ゝ為ゝ人ゝたにとはもいふこはかふふ
物ゝせんなゝとゝいてゝさはこふくおふ
さとはへゝこ蛇ゝ後為ゝふふんゝ活
為ゝ所なり

雲林院　文字九まきもへ一かな時はそ

雲林院ニテ桜の花の散るを見て

まこもりのみまくうとんかんとしもへ一い

はまこもうとんかん一ゑ絵や　ソウク法師一承均

桜ちる花の下かな雪そ降て消てゝ

義なし

桜の花の散

侍るを見て

花ちるとは風の所為と散りて振

ん袖をとゝかもして　ソセイ一

雪杯ニテサクラの花ヲ侍る

いさ桜我も散なん一さくらわりなく人へ

わりなくもあるかな　ソウク一

アヒシリケル人ノ三月

マウテキテカヘリニケル後ニ遣テ

花ニサシテツカハシケル

ひとめ見一あやなく侍る桜ちる

ツラユキ

花とめ八一月なりもとゝふ結ぶてはいちる

心ナソコナヒテワツラヒケル時ニ風ニアタラシテナロヒコメテノミ侍ケルアヒタニオレル桜ノ枝カタミナレリケルヲミテヨメル

山の桜をゝ

山の桜をゝ

とゝ散なしと花よりも

基度かゝくもん桜も散まとそにも見るへきあを

散りいちるとも花の引来も寄るに結ぶ桜しるる

暁ヨルカノ朝一

花とゝ中ゝ風ゝあれしとくとみゝ

ん花ハ風ゝ散ものかれとたまる桜ハ風

ゝわゝねもちりゆゝと世のかさりのかれ

ぬ事をとりとゝふ人ハけんゝゝ叶

いてわゝれ花ハ散なり　スカノ一高世

東宮雅院ニテ桜の花ノミカワ水ニテリテナカレケルヲミテヨメル

枝わゝもわゝ散れ落ても水の泡とゝ

世間ハとゝ為へ作る所ゝ　姫御門ゝ

猶いれとも此哥を入ける桜ての心わけりし風
流すられ侍る哥なれハ又崩御の後歎
の切なる時此哥とおもふに哀もまされき
花の落てハ人のとなる哉あはれとおもふに也
母や又枝よりはなれしハ生まと泡となるとは
花のうつりしとる生死ごりに抱りありと
久縁さんと哥人にふ先ともりわへきうや
我人の道胡つまやうあしてむまいろと
云ハ此哥なとのみて

サクラノ花ノチリケルナヨメル

ことならはさかすやはあらぬ桜花見る我さへにしつ心なし　貫之

花より切るんて

サクラノゴトク疾クチル物ハナシト人ノイヒケレハヨメル

桜花とくちりぬともおもほえす人の心そ風も吹あへぬ

人ハ心とく世にかはる也桜人の心をとハ移の世をと
うけなる朋友史書もうつろふてなれハう
くこそ胡くしかつくたき哥なり

桜の花の散を詠る

久かたのひかりのとけき春の日にしつ心なく花の散らん　紀友則

風も吹せぬのとけき日に志心なく花の散らん
しきりいそうはしくちる花をうらむる心

春宮ノ帯刀陣にて桜の花のちるを詠る

春風ハ花のあたりをよきてふけ心つからやうつろふと見ん　藤原よしかぜ

花鏡をへきんわり
よきてハ除てといふ
風より根もわかしといふ也

サクラノチルヲヨメル　凡河内ーー

雪とのみふるたにあるを桜花いかにちれとか風の吹らん
世のありやかくなるを風もさそふ哥なり

ヒエニノボリテカヘリマウデキテ読る　ツラユキ

山たかみ見つゝ我こし桜花風は心にまかすへらなり
盛りし高きとよみちかきさへ見れは
わかおしこゝろ程とへ我の心もおり風
さんことかふに我心に任せぬと

ゑーー　大伴黒主

春雨のふるは涙か桜花ちるをおしまぬ人しなけれは
心は世界（せかいみなをそて）人花をおしむ心切にされは天も涙（なみた）
春雨となりてわかるゝきりやふ義さ
あるは雨の志めやかにふりてねしつゝかなる
ちる花のちるを見てくたりいてけるかや

亭子院哥合の哥　ツラユキ

桜花ちりぬる風のなこりには水なき空に波そ立ける
心は空にちりまかふ花の波（なみ）に似たれはかく云
なり水なき空とはたゝ波のえんに云出せると

ナラノ帝ノ御哥

ふるさととなりにしならの都にも色はかはらす花はさかり
是は大同の天子（ごじ・てんし）の御哥なり位の後ならに
すみ給ひける時にさく小花の見
いにしへも今もかはらすさけるといふは此院
の御述懐なるへし

良岑宗貞（よしみねのむねさた）

遍昭（へんせう）ともむね貞ともいはれし事あるは
男にてよめる時は俗名を書出家してよみし

家ハ法名と申なり紐父帝よりもてなしけるを
ともかくもみしらねもゆかりやまさしく名ある
しらくもんゆくへきなり

はるのうたとてよめる

花の色ハ霞にこめてみせすとも香をたにぬすめ春の山風
香をたにぬすめとは句ハいとなりとも山風
かりしそひといふ心也いふこゝろぬをむしといふ
歌詞ハいちしるきー

寛平御時后宮ノ｜｜ノ哥

花の木も今ハ堀うへし春たてハうつろふ色に人ならひけり　ソセイ｜｜
心ハ此花も人の心のうつろひやすきを
とかめ見んハかなしミてそわまやまに花の木も
といはうへしとくさふかいつなり

そー

春の色のいたりいたらぬ里ハあらしさけるさかさる花の見ゆらん　ヨミ人｜｜
花のちるハおなしこともの春の色のいたるかさるか
きらしとそ申侍る
述懐もかゝるへきにや

春の歌とてよめる

三輪山をしかもかくすか春霞人にしられぬ花やさくらん　ツラユキ
志ふかくとハ隠さしくもといふ心也ふかくすふ
総かくし人にしられぬ花みたなるや山さくらや

雲林院のみこのもとに花見にきた山のほとりにまかれりける時によめる

いさけふハ春の山へにましりなん暮なハなけの花の陰かハ　ソセイ｜｜
御抄かくし也

春の歌とてよめる

いつまてか野へに心のあくかれん花しちらすハ千世もへぬへし
花しちらすハとハ春ハとにかくにかゝるへし

てんしの師となりて、さめて行かりくはし
なる世奇妙くさわききくのすることて
或人の注に、この句まそ、八行わかつさをやしのんし
寿毎よ花の感いかりあるとあひみんとハ命こそ
わりなれとこいはんもとらともこんはし
花のこと世の常ならぬ心地者ゆゑ海ほ
ちく物ゆ
映風よあはれ人はかるあ物ハ
はるる花苦くんい花のすとはしいハ
ちるは花苦くんい花のすとはしてあまま
ちるうこるる花よあもてうりなさ
事ともたりのなるへ

宴年中時后宮ノ
一ノ宮

行人もあわれかふ鶯のなかれはるる花
鳴つる花とわてうるれとハ鶯の春りるね
春はわるもとうるひとれ鶯へき花とと云
毋も花とうく行人のこあかりれとくさ
暖花いふ花ふるふわるこれ鶯の春とうる見異さる
ちくさかるる毋は花とい花ゆみあるかれと
のんこ俗いゆ

高砂すこ友の春はよてうるいなるひく山は花の落も
花の友はうりはの山はとく花と映して
たるりはうる春の友見てうるさ海こんいて
春もれ花こ

在原元方

霞ゐる春の山へ吹くる風は花の香をさそ
はなつれなく霞こめたる山を吹くる風のう
ちわたるさはりなく散るよりはかなき物とこそ
花見れば心ぞ慰むる多くは年人ごとに来れど
ウツロフル花ヲミテノヨメル

思イ

三ツ子

さくらぬ人のうちとけぬとはいひてく多くは出べき物にあらぬ
花の末もかりうへにしてこゝろ
萬のなかに春毎に来てこれ程に花を愛
うらひとの心にかはりて鳴とやなくらん
ふるさと地を移りてうつる鶯の毎年来
みるうらうらひとの鳴いうつろふ花の
読ヽヽヽ

ヒヽヽ

風ふきたれいかりとおもふ
吹風を惜て恨ぶよ萬の花やいかに
人のわかれをかなしまれつゝ散
ちる花のなかに春の惜うらひとの心
彼方に人ふるさとの春の花
春のもとの家氣はんと
仁和ノ中將ノ家ニ哥合セントテシケルトキニヨメル

ミヤスムコロノ家

ニ哥合セントテシケルトキニヨメル

花の散とや滝さは霧の山のうらひとの心
もとゝ殊勝の花の姿と月の事は
もかさりへうとゝ云事や滝のさとなれ
なりとゝかなりきとゝいふ人をとゝ云の

豊侍従子朝臣

フヂハラノ後蔭

ゆふくんたり心へし気氣の音なからしと字中
ゆゑ文字を不知や中ゆなからし人の女なれハう
たかふるなり

鶯のなくと読る

木つたへハをのか羽風にちる花を誰におほせてこゝら鳴らん　ソセイ

我やハ花をなとの花へちらへれはさこうしむ
心下の心ハ桃を絶よゆづるんの風あり

鶯の花の木にて鳴を読る

しるしなき音をも鳴かな鶯のことしのみちる花ならなくに　ミツ子

上句世よ観して見られ人さきそろひをのこ
心のもしゆしかるへし

同ーー

駒なめていさ見にゆかんふるさとハ雪とのみこそ花ハちるらめ　ヨミ人不知

此歌在所のくしくね叶雪をぬこう也

心の見る人をかしきの花のちりしくらんさかり
あれかてさしや

散花をなにかうらみん世中に我身もともにあらん物かハ

このちる花をいふと恨てさやうにおもなんハ事
あさきりや花を去つ時ハそのかくさまらん物
のやうにおもしと来つよろちられハ風とも花とも
恨とわけてその時しやとおりひつひて散
花を何ゝ恨らん世中ゆくいつやうよ心を
見る人さし下句ハ明之

花の色ハうつりにけりないたつらに我身世にふるなかめせしまに　小ーー小町

心ハおもしろき事を花の色うつり

まことへいふならば我かよならせしまわさとは
あくまでも世にふるはやう座と掛かなりふかさひ
かうとことに好色の掛かれは世とよんでも眼
見からそ井衛くわけうるほよとらふ
家事とおく縁さ歌くして比ん小町よ似る
色かしもと花又かなめと羽林八霖雨このへ
ふかりなるも一の義なりとゝん一に為し於比
哥より文字惜れともさしよやかも事
え縁の妙して

仁和の中将の息所の家ニ哥合せんとしける時によめる

おしと思ふ心は糸によられなん散花ことにぬきてとゞめん　ソセイ

花よ心をしつかさわすわなくハりかならぬ也

素性か哥母はわたる和ならへき也哥人の内よりも
人のやうしとかしハ志るへき事しとそ

志賀の山越にて女のおほく逢へりけるによみてつかはしける

梓弓はるの山辺をこえくれハ道もさりあへす花そちりける　ツラユキ

花ちり女とそへてよめる也さりあへすとハ人の
歯とひふうりなり

寛平御時后の宮の哥合の哥

春の野にわかなつまんと来しものをちりかふ花に道はまとひぬ　仝

わかれとつくに出し時ハ雪ありしともとうへ紀分てそこと
なきことを為しりしとハみちらうふ花ふたる
よしんハ光陰の短なきをしといふ縁

山寺にまうてたりけるによめる

やとりして春の山へにねたる夜ハ夢の内にも花そちりける　仝

花の散わりしれ春の山の脇にはさしも侍らん

寛平御時后―
――のうた

き事かなり

吹く風と谷の水としなかりせハ深山かくれの花を見ましや

おもひなして眼ことよれそなんと世上れ義よ

を読侍りやうなれ統こもやうなる事之

志かよりかほり
こぬるおうなをも
の花山よいまて
花のちの色をふ
云よせて久里
ある哥讀く
をとりける

よみかんて此うた人に花の花をいひまつれよ枝ハをるとも

これとくさりせとれと侍るハ遍昭のさうさとを

るへかるへし人ハ口舌かしとやうの事侍れとも

僧正遍昭

と云へきれと枝ハをるともこゝろかせる遍昭ハ

常りもとらしされさる哥侍りしや

家よ花の花咲り
ける所人の立寄り
て見ける所讀る

枝前まひけるをも流立よりてそのこ人のみうらん

三ツ子

りやとよさるとりふも日来ハさもかくさん

の世花の時りちしろくるよみろうしとよめりた

よむ心なるへし

そ――

とをうと咲かぬ所かんたち花の山崎の埒のやまかさの花

まてはんしとたりくむともかもハ海ちらしもけ

例の五く字之猿丸哥之類昭れハ山崎れく海と云り

春雨よ色へ字も云へきなくに香さへなり山吹のを

もろしう流る山ふきの枝ゆらしと打なひき

みろゆれれかりしぬきうあさへ事のあしく此去

清―――

れなし

山吹ハあやなく咲そ花みんとうへけん君か今宵こなくに

よのト

人ありしれ物へいそなる家のとなりかしさよ

ゆるしと雨とのつゆ
吉野川の辺に山吹の咲るを
よめる
吉野川さき山吹てゆく風にそこのみけしきなりにしかな
上うせろへい新しかり
清人
かの月かく井よの山吹咲よりの記のさきにわかまし地と
蛙かく井よい花胡蝶組とも一いかひしかりこ
清友い法光の孫と云て家
ツセイ
春の雨りにて
よめる
なしふるの山へ行むまてそこれいとも臨れそ
山物枯れ
たいられてなりふるちいう分る山ぬも
振れとも
てかくもやこ
梅ツ子
梅ちるる三ーしら年月のつるくくもれかゆる
三月九日
月のすくはるとやさ枝こ

月とたやこしおるる所ん月日といつへ
くるとしく奇いかかくもも春の奇とも
見しはるとと寄ーこれるこ立初てし
るれ花かくはこ一とも丸未とも
ツラユキ
かりふしかり
かりとも見花なけ寄鶯もてい花ちくく流れ
人い流かくて物ちくくい流れ
ちくりこんよい家刺をへ
ツラユキ
みくいけ家ちたる根のこと流不ぬ
門口と家ん
フカヤフ
花ちも所水のまたくこれい山ぬ去もなく流

深くまかく散よいは花を山と跡もしは本
もとはみなにも暮なくなりて花はみなち
りもそ水よのこりろとみくやしいは流にも
利かれは山中は春もなく散よくりとおもろく
よしよしと此のつこまかくさと言の詞ゆるし

春をおしみて読る

惜めともとまらなくに春霞かへる道にし立ぬと思へは　元方

此春霞常此山よ花を春と霞の主にして
それのかへるは霞もうちともなりしなり
それとくゆる心あし立ぬしたりへいとは言のこ
りとれて八又おもふ心をもはらしむる心と作る

寛平御時后宮歌合のうた

こゑたえすなけや鶯一とせにふたゝひとたにくへき春かは　オキカセ

心は二たひとは春の内をはしき事と思ふ也
けりとよみ給ひしは此春この月の日花散とゝいひしか
せとも見よくよめる流とはしとめ給はす
或といふ文は女の春の内りたるきへなりと
野に出ても花の多くと流るゝもるとて
世縁の霊とをつひ縁ふ事わりされ
とかるともく女ともの出くうとみくよめる
とといひり此事京極黄門けよ自筆もり
て本し家と云く相本に右近の将監兼亮よ書く

弥生の晦日の日花つみよりかへる女ともを見てよめる

とゝむへき物とはなしにはかなくも散花ことにたくふ心か　ミツネ

おもひおくるわかれなりしゆへかくやんなる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

よんを付くかりてはりひわたりひいるなりひと
はらんは死とたちいまてる母はあるを心
やくひれ刃

よろこんをんん

四月ノ時ニシテ云ヒカロキ所ヲ云ヒ
ナカメトテ有月
ナ時ノ紅ノ霧
トスムヨツテ云月
マリトヤリ

有行山時鳥なきともなくんこゑ
ハルマル高鳥ヒ
行とうんくくはとひくくやこえる
とりもこいあまもきんをとりみ有まつい和
はなり

コレモ初ヒ
キヤリヤモ之
今ノ人ウヒキ明ニ
ヲ月ヒ之ヨリ明ニ

さ月こ分紀もりもん時ちるまてこえ行の松ときなるや
ナキフルスナリ
ハヤキ
今ノホトトギスコトニ
侍歌日
タキト
ヨモ

かな紀もうもんといわまひうぬさきうとこ
スイ仁天一九十七年
迎間寺ヲ
トコヨノ仙ニトリヨセタマフ

有まつ紀ちる紀のまとうけ人者の人は紀のうそする
よろこんをんん
心はもうしはんをうとりはうふ物

山れてくるよ物紀なり物紀りはいりうくへ
いけのまふ有きはりんを月の山時るはりそなくあ
月月はうあへと時るりはなと物をくやよ
ようなり 元陽ノウルナ時ニシテナセフ之
と朝きな紀まる時なる時ちる紀ちる時ちる有りん
ナラハ新宮ノ
たん
カレヨト之
うめくは時るとやメて紀ちる邪ち有い
うれとれりひ元えるなりやもくはせりり
きんをなるへ

きのうもの里

ととく山けさきくれ時ちるかとそ時なる
とこ
けさきくれ時ちるかとそ時なる
行くやりく今きりり生と行ち時ちるの物をうふのくや
ヒカレトを仮ハ方ニ
ヒラ思ヤウニモ
ナキヤより

古今集卷三

なる紀なるにて松と海さとうんと氣色
のそむさ風光れりし海くや
鄙島と門敷をけいわちさなく生ちまつの浦
わらきかくハ常よ人れ云んと心ってたなし
くたしかん人ときさ海かきしし此月よた
りへ出られもそれきとつん家情
なしれいそれうと寺うり なるをうくり不
られかく寺し 石上の神寺ハ上の郡ニテホフト国一ニ
鄙公の哥を万葉ニ載セリテ
あつのうと山る紀郡の哥るこ
あつのうと門りうう山るんと心い義なし
山る紀郡なしれ寺し

鄙公のけしめく
哥寺るを学ぶ
よめば

メツラキモノニ
人ニ一ツヤ月日
メキウ之

ソセイ
俗トモナク人ヲコフンナリ

鄙公の哥

イトヽメニ

夜山のよなく哥るんかハ物ニふ我りこ家かきうせそ
物なし形しもの形ものとをけいいやくれりひのそよ
んこけすとれりんふうきるなれい
哥るなく教えけいられ形 為さへそ思ひかりる
思ふ海のんこ 故里ヲ思コヽロ高揚ルト ナリ
郡云なるれく里れわまこれ形とまれ思ふ物り
ハ物りくり
れりハ出ると紀ハの山ハ哥るかこれ弁のより出てそれく
かこれを弁とはもれやうみこれ美とそへて
なくんと我ニ人とれりハ出さう形しも哥る
のより出くなこと思ひこかくれりひも

海内のしれもの共なり
りたるこそなり
扨八月十五夜月島我家に月見かるん
歌ハ忘いたてねと海の上にはかとこれいたるひ
よそへてうたいつる
是引の山の月を打ながめて雅なること称とのこと
打りきへていれなし事くんい我れるひ
此人りの海ゆる事とはなくきなるゆり
てゆるこ

一万十五夜
拾遺七巻

きく打りの瑞象ナニ
ゆるこ八月宿ニ
ナケトエニ

とゝ更よ山へ海るゆ月
今さらゆ常のやうにいたりこいけと

きりてさらゆ
わりハこれと更こ
為ゝや

ヲカタルコトハ

為ゝや海て月ゆるこ

沖ノ山ウヲク

海てん我世ゆ位りひね

ハ秋ゆくり

ハカ思ヤルカメチキニ

紀友則

月ゆ思ゆ我ゆくゆ鳴ていつらり
ゆハ月ゆ海ゆ月ゆ海ゆかきくゆを
物とゆ月ゆ海ゆ月ゆ来なゆゆ
かゆる月ゆ我ゆ月ゆ明るの月ゆ鳴て
ゆ月ゆ月ゆ行らんとゆやむ

宮ニ年ハ時
后の宮の歌
合の歌

秋やまぢ紅葉や海とつる時る秋霧てしも色そ
ふかいまるのくれりとも色うくくりなく
うえ月へきかりと海とひてきくへ春ふうはる
はなうう秋やとにいなりーせいやうれんを
ゆくらせて紅葉もかきれるよなと時る秋へぬん
かきとかくあとはうつわおといるやうの
ふくく奇ハ長ナ

紀貫之

夜の秋のみとそれ時る時一秋くはるまのめ
色ハ夜の秋とせんとしてよめるとそ云
時るうりとんしてみくく一ふあけふ
といふかり

土佐忠岑

紀友則

人ノミニキトキハフリセテ
ナシカハシフリセテ
ハヤ夏山ノ春キ
人ノアルヤトヲ云

紀友則

夜山の春ーきハ人やふんかりたてく時る時鳥
色も夜の秋ハ時るのきさりーなく
とやてよめる

紀友則

ほとゝぎすこそ
なくとやてうくくれりひとそ云る

僧人丸

去年の夜時るそれ（ゾラハ秋ノモノルハキナ）ハ時るそれ秋の
こゑハ去ふ夜ふかくなくとも
ふかくなれハそれ秋ハ
なりや

珠こり黒ヨリ云

又月夜ハやとそ時る行とし
なくん

[illegible]

[illegible]

[illegible]

我とはなしかとゝ我とゝるゝかはなかめ一にと
いふ義こんはとゝとゝ物とてはりふしかなしきは
世をはかなけはかりやとゝとゝさ世はてはりひも
はかりとゝ卯月の花のうす紅世のゆめとゝ清く
くるはうれ宮かさわる紙こうれ花と志おて
月分一さ春よりもはは異よ入かり
又云我こうはかりあるはかりかゆゆへふとゝ云
んこい涙まもりは紙ゝくれと色はは浅うん人
きゝや

たゝれをの露をきて清る

蓮葉のおうりみまぬんて行かは宮とゝ
ふとゝりてこわさもくはは色とゝ

僧正遍昭

フカヤフ

月の面かゝる夜暁うしく清る

夏の秋かまゝ宵なゝるゝ雲のゝてこは月やゝる
んはゝゝはよあるねゝこ又云月はまゝ
の色よもあるへくはりよ月さへんて秋へ
はゝはかなり

蟬とゝこゝとゝ嘆しゝ蟬と我はゝこ夏
ちりゝよはは切なゝん蟬とはゝ夏ゝは
とはさゝはいはこたくはゝと我はゝ春と云後
ゝゝ切なゝ後

三ツ子

三日月の晦日の日よめる

夏秋と行よ色の西海はゝえ千ゝし き風や吹ん
りゝはは月ちゝこゝえ千ゝしきゝゝも
ゝきこゝとゝはは月ゝ色の月よ

三十八

三十九

ふかき秋のすゑ〳〵に紀氣と年若(せん)き人と夏の暑(しよ)
の氣とを惣(そう)り知る人は善惡(ぜんあく)を分(わけ)て中庸(ちうよう)
とは有(あり)きよ丸へ〳〵惡(あく)なとゝ別(わか)れとも物
と雖(いへど)ものゝ暑(しよ)き氣も秋(あき)の初(はつ)て狂(くるひ)ありて人(ひと)と
ゝ物(もの)をそゝ〳〵きなし